

短歌の学習における生徒の意識と課題

上川 寛子

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: hi_kamikawa@tottori-u.ac.jp

KAMIKAWA Hiroko(Tottori University Junior High School): Students' Awareness and Issues in Learning Tanka Poetry

要旨 — 国語科では、他者との関わりの中で、問題解決に向け試行錯誤し、見方を広げて自分の意見を構築していくことを重点に置いている。しかし、他者と関わる場面で、十分な話し合いにならない場面も見られる。短歌の授業の様子やアンケートから、生徒が話し合いをどう捉えているのかを探ると、学習としての意識が強い点に課題があると考えられた。自ら意見を構築しようとする生徒を育成するためには、授業を単なる学習の場とするのではなく、教材自体の面白さを知り、疑問を持って学習課題に取り組めるような活動の場とすることが必要である。

キーワード 課題解決、話し合い、短歌、伝統的な言語文化

Abstract — In Japanese language studies, the emphasis is on trial-and-error in order to solve problems, expanding one's viewpoint and constructing one's own opinions through interactions with others. However, there are some situations in which students do not engage in sufficient discussion with others. Based on the tanka class and questionnaires, we investigated how the students perceived the discussion and found that the students' strong awareness of the discussion as a learning process is an issue. In order to nurture students who are willing to construct their own opinions, it is necessary to make the class not only a place for learning, but also a place for activities that enable students to learn the interest of the material itself and to tackle learning issues with a questioning mind.

Key words — Problem solving, discussion, tanka poetry, traditional language culture

1. はじめに

1.1. 現状と課題

めまぐるしく変化する社会においては、いかに柔軟に物事を捉え、考えを広げて対応していくのが重要になるのではないかと。平成 29 年告示の学習指導要領では、資質・能力の育成に向けて、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図るよう述べられている。単に知識を記憶する学びにとどまらず、多様な人との対話を通じて考えを広げたり、身に付けた資質・能力を様々な課題の対応に生かしたりすることができるよう、指導を改善していく必要がある。

本校の国語科では、教科で伸ばしたい力を、「多面的・多角的に考え、自分の考えを構築する力」と考えた。その過程では、他者と交流する中で、問題解決に向けて試行錯誤しながら互いに話し合いを深めていこうとする姿勢が必要である。そし

て、話し合いで広がった意見を客観的に判断し、意見を適切に取捨選択しながら自らの意見を構築していくことが必要だと考えている。

しかし、実際の授業でのグループ活動の様子を見ていると、互いに意見を発表し合い、出された意見をそのまま述べたり、ある程度意見が出たと思ったらそこで話し合いを終えたりする様子が見られる。出された意見に安易に満足するのではなく、よりよい解を求めてさらに意見を追究しようとする意識を高めていくことが必要である。

1.2. 研究の目的

国語の授業では、3～4 人の小グループを活用し、話し合いによる課題解決を取り入れている。しかし、意見の深まる話し合いになりにくいことも多々ある。そこで、本研究では、どのような話し合いになると意見が深まったと言えるのか、話し合いによる意見の広がりを見取るとともに、生徒にとつ

ての話し合いの意義を探り、今後の授業改善の手がかりとすることを目的とする。

1.3. 研究の方法

本実践は、中学2年生140人を対象に行った。実践では、話し合い活動による意見の変容の様子を観察やワークシートの自由記述を通して捉える。また、生徒にとって話し合い活動がどう捉えられているのか事後アンケートの記述から探る。

2. 授業の実際

2.1. 教材について

本単元は、教材「短歌を楽しむ」で具体的な作品の鑑賞を通して短歌の味わい方をつかみ、教材「短歌のリズムで表現しよう」で短歌を創作するように構成されている。

教材「短歌を楽しむ」で、筆者は、短歌を「決して難しいものではなく、今をいきいきと映せる文学である」と言い、「読者が感じたまま、思ったままに鑑賞していい」と述べている。

短歌は、三十一文字という限られた音数の中に情景や作者の思いが表現されている。そして、その言葉の少なさ故に自由に想像を広げることができるため、自分の思いや考えを広げたり深めたりする活動となりやすく、対話的な学びとなりやすいと言える。

2.2. 生徒の実態

事前のアンケートでは、短歌に対する興味が「ある」または「どちらかというところ」と答えた生徒は全体の4分の1程度で、多くの生徒は、短歌に特に興味を持っているわけではないことが見て取れた。生徒の自由記述から、短歌がどのようなものかあまりよく知らない生徒がいることも見て取れ、短歌に触れる機会がないことがうかがわれた。そこで、短歌を自分たちの身近にあるものと捉えさせ、興味・関心を持たせる工夫が必要だと考えた。

2.3. 授業におけるやりくり

① 活動の設定

生徒に触れさせる短歌は、生徒たちの実生活に近く、より共感しやすいものを設定することとした。現代は、コミュニケーションツールとしてのSNSが発達し、短歌もSNSを介して人気が高まっている。『公募ガイド』(2017)によると、短い詩であ

る短歌は、俳句と違って思いを述べやすく、SNSはリプライ機能もあるから、感想や批評が容易に帰ってくるのでモチベーションが高まると述べられている。そこで、少しでも伝統的な言語文化である短歌に気軽に触れられるよう、同年代の若者がSNSに投稿した短歌を扱うこととした。生徒には、短歌を自由に検索、鑑賞させ、その短歌に応えることをイメージして、短歌を創作させる活動を設定した。

② 生徒のやりくり

言葉の一つ一つに立ち止まって味わうことができれば、短歌は楽しいものになる。ただし、言葉だけの理解にとどまるのではなく、様々な体験や出来事を短歌に重ねたり、情景や心情を自由に考えたりするなど、生徒自身の実感を伴う理解を目指したい。どのような似た経験や体験を思い起こして短歌を理解するか、そのよさを伝えるために、どのような例を挙げると相手の共感が得られるのかを考えさせる部分に、生徒のやりくりの力が試されるのではないかと考え、授業を構成する。

2.4. 学習計画

- 第1時 短歌に用いられている言葉が与えるイメージについて考える。
- 第2・3時 短歌の味わい方を確認する。
- 第4時 短歌を選び個人でよさを考える。
- 第5時 グループで選んだ短歌のよさを考える。
- 第6時 短歌の創作をする。
- 第7・8時 短歌作品集の作品を作る。

2.5. 活動の様子

第5時の短歌の鑑賞では、短歌の投稿作品の中から、生徒と同年代の若者が作った作品を中心に共感する作品を選んで鑑賞した。そして、自分たちが選んだ短歌の「よさ」を他のグループに伝える活動を設定した。

短歌の「よさ」を伝えるには、状況がより詳しく説明されたり、聞き手の共感が得られるよう似た体験等を挙げたりするなど、説明の工夫が必要である。授業では、個人で意見を考えた後、小グループで共有し、深められるようにした。

「絆」をテーマとした短歌を鑑賞したクラスでは、グループの意見として、親子の絆を扱った短歌について述べられた。ニュースで見た親が子どもを

守る話題や、自分が親に守られたことがあった例を挙げ、親が子どもを思う気持ちを想像して説明していた。また、好きなアニメの一場面を例に挙げ、友との絆について説明するグループもあった。しかし、具体的な例や詳しい状況を挙げて説明したグループは少なく、表現技法が使われている部分を挙げ、その効果を「よさ」として説明するグループが大半であった。

グループの意見の共有ではあまり広がりがあったため、改めて「絆」を感じる場面を確認した。ペアで確認した後、全体発表を行った。一巡目の発表では、「部活」「友達」「手紙」「甲子園」「応援」「同級生」「信頼感」「家族」「幼なじみ」等、抽象的な出来事が述べられた。しかし、ゲームで遊ぶとき「喜びは2倍、悲しみは1/2」というような具体的な意見から発想が広がり、二巡目の発表では、「バスに乗り遅れそうなとき、友達がゆっくり乗ってくれる」「横断歩道で、待っている友達がタイミングを見てボタンを押してくれる」「ぶつかりそうになってよける時、同じ方向によける」等具体的な場面や、アニメの番組で心に残った場面が述べられた。また、人との絆だけではなく「自分と自分の筋肉の絆」として筋トレを絆の例として挙げるなどユニークな意見も出された。この話し合いを通して創作した短歌(表1)では、日常の中の普段当たり前にある些細な一場面を目をとめた作品が創作された。意見を共有することで、これまで気づきにくかった場面に目を向け、視野が広がったと考えられる。

短歌の創作を行った後、第8時では改めて教科書の短歌の鑑賞を行った(表2)。鑑賞は、個人で考えた後グループで交流し、改めて個人でまとめさせた。若山牧水の短歌「白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染そまずただよふ」を選ん

表1 生徒の創作短歌

・買ったとき貸してと言われたこの本を読み切れてないが貸すことにした
・朝起きて今日の気分はこのにおい母が焼いたいちごトースト
・この気持ち分かってくれるはお前だけ顔を埋めるいわゆるネコ吸い
・暑すぎるその声聞いたクラリネットそれなと共感音高くなる
・捨てられずたまりにたまった手紙たちもう六年もたっているのに
・あれこれそれぞれ以心伝心帰り道夕日に照らされつられ笑い
・道中で母はずっと車道側当たり前と言う母の偉大さ
・「まだいける」諦めかけける筋肉にエールを送り踏み出す一歩
・後ろからどんとたたけげばすぐ分かる頭の後ろに目なんかないよね
・昼休憩誰か一人が歌い出す気づけばみんなで大合唱
・タッグ戦分断されてくらうトベしかし最後は二人で「消灯」

表2 鑑賞文

(初めの気づき)
自分だけ違うのは悲しくないのかという気持ちからちょっとした疑問
↓
(グループの話し合いを通してまとめた鑑賞文)
作者が、青い空の中、あおい海の上を白い鳥が飛んでいる風景を見たときに考えた短歌だと思う。白鳥が周りの色と染まらずに、周りとは違って自分の意志を通し続けて勇ましく飛んでいる様子から、周りとは染まらずに悲しくないのかなというちょっとした疑問からできた。①普通の人はこのような景色を見ても、白鳥は悲しくないのだろうかとかは考えないので、②作者は周りとは違い、嫌な気持ちだったので、周りとは違う中、勇ましく飛んでいる様子を見て、白鳥は悲しくないのかなと、普段は思いつかない疑問が生まれた。

だ生徒は、初め「自分だけ違うのは悲しくないのかという気持ちからちょっとした疑問」を持っている。そして、グループ活動を通して、状況を詳しく想像し、最後に個人でまとめる際には、自分の経験を盛り込んで(下線部①)、作者の心情(下線部②)を鑑賞文にまとめた。このように、自分の体験を述べたり、情景を詳しく述べたりすることで、より伝わりやすい鑑賞文にしようとする様子が見られた。

3. 結果と考察

授業後、話し合い活動についてアンケートを行った。話し合い活動が好きかどうか4件法で聞いたところ、「好き」または「どちらかという好き」と答えた生徒は108人(n=125)で、理由として、友達と意見を共有することで、見方が広がったり考えが深まったりすると述べ、概ね話し合い活動には肯定的であった。

図1は、話し合い活動で意識して取り組んでいることを表した図である。「1 積極的に意見を言う」ことを意識している生徒(56.8%)に比べ、「2 友達の意見をよく聞く」、「3 意見を聞いて考える」ことを意識している生徒はそれぞれ78.4%、63.2%と多く、話し合いにおいて「聞く」活動を大切にしていることがわかる。また、「4 疑問について質問する」

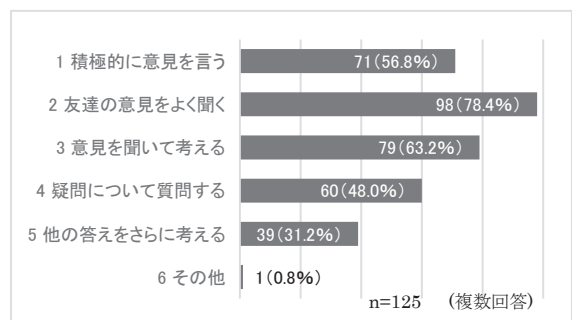


図1 話し合い活動で意識していること

る」は48.0%,「他の答えをさらに考える」は31.2%と、話し合いにより、意見を深めようとする姿を大切にしている生徒もいる。

実際の活動についての質問項目「話し合い活動でよかったと思うこと」(図 2)について自由記述したのを見て、「2 他の人の意見が知れる」が16人、「3 違う視点の意見が知れる」が54人、「4 よりよい意見になる」が20人と、意見の広がりや深まりに話し合いのよさを認めている。しかし、今回の短歌の学習では、話し合いがすぐに収束する場面も見られた。これは、短歌が形式的な部分を多く持っていることが原因ではないだろうか。短歌には、表現技法など言葉の工夫が顕著であり、その意図や効果に目を向ければ内容の読み取りにつながりやすい。そして、読み取りを行えば、学習は終了とも言えるのである。日々の授業の中では、学習課題に対し、すぐに答えを知りたがる生徒も多い。短歌の鑑賞を楽しむというよりは、学習としての短歌の鑑賞という意識が感じられた。

「話し合い活動で困ること」(図 3)の自由記述を見ると、「2 意見が出ない」ことに半数近くの生徒が困り感を感じている。視点の広がる意見が出たものの、その意見をさらに深めていくような話し合いになっていないことが考えられる。「話し合い活動で困ること」の中には、「5 答えがすぐ分かる」と答えている生徒が5人いる。これらの生徒は、答えを知っている、または、答えが分かったので話し合いがすぐに終わると答えているが、実際には、多面的・多角的な視点でさらに意見を深めてほしい場面も多々ある。今回の学習では、表現技法の効果を確認したことで話し合いが終わったグループもあったと考えられる。答えが得られて満足し、

他者との議論を通して新しい視点を発見する楽しさを見出すまでには至らなかったとも言える。

全体での意見共有では、身近な具体例を語ったり聞いたりする場面で学習を楽しむ様子が見られた。このように、意見を共有し、自分たちの体験や似ている具体例が想起されれば、詠まれた心情や情景が人ごとではなく自分と通じるものとして共感的に捉えられ、短歌をより深く味わうことができる。また、短歌の世界を自分たちの世界と重ねて考え、実感を伴った言葉で考える姿勢は、伝統的な言語文化に親しむ態度につながる。

このように、単なる学習としての活動の域にとどまらず、多面的・多角的に考えることのできる活動の設定が必要だと考えられる。

4. まとめと今後の課題

これまで各活動の中で、教師が問いを立て、生徒の思考を促してきた。しかし、生徒に必要なのは、試行錯誤しながら課題解決に向け、自身の力で進んでいくことである。問いの設定により生徒の活動が左右されるのではなく、生徒自身が学習を楽しみ、進めていくことが望ましい。

自ら問いを立てて追究していくことは難しいが、話し合いで深まるからこそ味わえる楽しさを感じつつ、目の前にある課題に疑問を持って取り組んでいけるような課題設定の工夫を重ねていきたい。

参考文献

- 文部科学省. (2019). 学習指導要領解説国語編. 開隆堂.
澤田香織(編). (2017). 公募ガイド. 株式会社公募ガイド社. p.8.

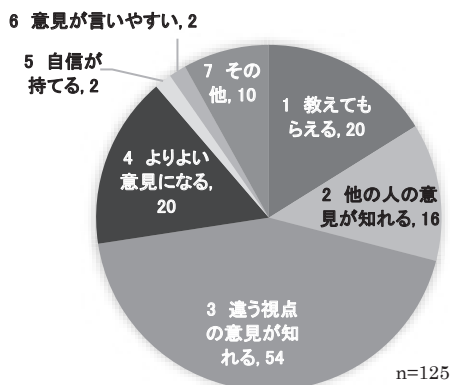


図 2 話し合い活動でよかったと思うこと

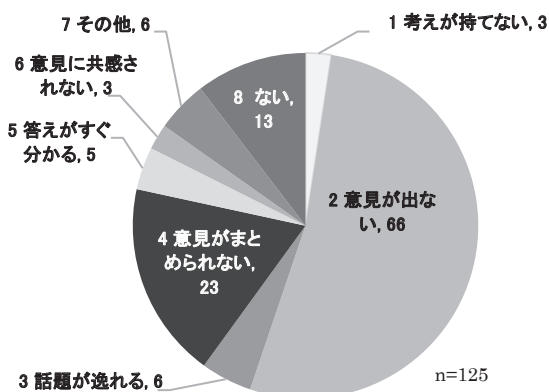


図 3 話し合い活動で困ること